

隠蔽されたストーリー

——芥川「桃太郎」の生成について——

黄 暁 波

はじめに

芥川龍之介の「桃太郎」は、一九二四年七月一日、『サンデー毎日』夏期特別号に掲載され、翌年、岸田国士慰問集であった『白葡萄』に収録された短編小説である。

当然のことながら、この「桃太郎」は、それ以前から「桃太郎噺」として語り読まれてきたものと関係がある。滑川道夫は、芥川はこの噺に改変を加え、『桃太郎噺の骨格を踏まえてはいるが、パロディとして創作』したものだという。さらに、「鬼を平和愛好者に仕立てて、桃太郎を侵略者として風刺したのは芥川が最初」とも指摘している。

また、「反軍国主義」の作品であるとする、関口安義らの論もある。関口は『將軍』と共に初期のプロレタリア小説として位置付けてもよい」とし、「発表に先立つこと三年、中国上海で会見した清朝末期の革命家・章炳麟の言葉が影響」しており、「侵略者桃太郎というイメージが日本帝国主義、特に当時の日本政府の植民地政策と重ねられている」と指摘している。関口は、「芥川は章炳麟の真意を察知し、三年後にこの作品を書き章氏に応えた」という。本稿は、この指摘に対して、帝国主義の膨張を風刺する作品であるなら、なぜ執筆が中国旅行から戻ってすぐになされず、三年後に発表したかという素朴な疑問から発し、芥川にとって、この「三年」がどのような意味を持っていたかを究明したい。

最近の論文としては、土屋忍「大正期『南洋』論の展開——鶴見祐輔と芥川龍之介——」があり、土屋は次のようにいっている。

芥川の「鬼が島」には自覚的に「南洋」のイメージが付与されている。(中略) イメージとしての「南洋」を鬼が島の舞台にすることを通じて「日本」に侵略される「南洋」像を描出したのだという解釈を付け加えてみたい。(中略) 芥川が批評し得たのは、当時の帝国主義というよりもむしろ、支配の手段となる暴力一般(中略)。芥川は、帝国主義を経由して暴力と結託するヒューマンイズムの限界をみていたのかもしれない

さらに、土屋は、「芥川は、桃太郎を侵略者とすることにより侵略行為を風刺することは成功したが、桃太郎の造形が単純化されているため、その眼差しは同時代の侵略行為を支える帝国主義の厄介な部分には届いていない」といい、また、「桃太郎」における帝国主義的な視座の欠如も指摘している。だが、「桃太郎」に読みとれるのは、「南洋」だけであろうか、本稿は、もっと広い観点、つまり、「帝国」の観点から、もっと複雑な事態を読みとろうとする。海老井英次は、この作品の草稿原稿をめぐり、つぎのようにいつている。

本草稿は知事になった犬の弾圧ぶりを描いている。鬼の鬼たるの所以である角を完全に除去する(桃太郎の発想)とは、アン・ヒューマンな考え方であるが、それを実行した後、鬼の反乱にあうという筋書きだったのかもしれない。寓意的な主題を自由な構想によつて書いており、鬼が島での具体的な反乱を描くよりは、本国に帰つてからの桃太郎を襲う得体の知れないものの恐怖を描く完成稿の方が効果的であるのは歴然¹⁾。

ここで、この完成稿で恐怖感が効果的にアップされたことを確認するために、その改稿の経緯について具体的な考察を以下行う。

滑川の『桃太郎像の変容』によれば、「桃太郎噺」は明治二〇年に正式に『尋常小学校読本』に選ばれ教材にされたという。それだけでなく、明治三十三、四十四年に二回、『尋常小学校唱歌』に載せられていた。それから、桃太郎噺は、童謡、漫画、絵本、伝統演劇、映画等に文化翻訳され、出版とか上演とかの形で盛んに受容された。勿論、教育思想界でも明治から大正にかけて、桃太郎を取り上げ、新教育論をアピールする風潮も起こってきた。芥川「桃太郎」を論じるな

らば、明治以降、「尋常小学校唱歌」の一つとしての「桃太郎」唱歌が、教訓性に富んだ小学校教育において効果的に機能したことを触れておかねばならぬ。『桃太郎像の変容』では、「桃太郎」(明治四十四年版：筆者注)の歌詞をめぐる、大正期になってクレームがつく。なにしろ、日露戦争直後のナショナリズム高揚の波にのって作詞されたものだけに、大正デモクラシーの思潮から見ると違和感が起る。封建的な侵略主義を次代の子どもたちに鼓吹しているのかという知識人の反発となつてあらわれてもふしぎはない。」と指摘されている。芥川がテキストを書き出すにあたって、こうした鮮明な時代状況からの影響はあるだろう。文学の方で、代表としては、巖谷小波の「日本昔話」及び彼の主幹した『少年世界』系列が芥川に先立っていたことが挙げられる。彼は「桃太郎主義」の教育論をはじめ、理論や実行などの教育事業に身を投じ何十年も続けたという。芥川の「桃太郎」は、以上のような時代の流れの中から生まれたのである。

以上のように、芥川は、作品を仕上げるために、その時代の何ものかを風刺しようとする意識があったと考える。この作品が初めて掲載されたのは『サンデー毎日』であつたが、この雑誌は、成立初期から大衆向けの読物と位置付けられていた。『大阪毎日新聞』の契約社員であつた芥川は、「桃太郎」の執筆にあたって、世の中で関心が寄せた時事問題を取りあげ、当時の文芸大衆化の趨勢に従い、昔話の外殻を借用し創作しようとする意志があつたのであろう。特に「桃太郎」をとりあげたテキスト群の中では、時局を反映している設定がないわけでもないが、そこに時事的要素が含まれていかにしても、子供向けの「夢物語」が多かつたのは確かである。したがって、ジャーナリストの視点から、独創性と時事性の両方を重んじていた可能性があり、芥川は、その多事な時期に発生した何かの事件に触発され、当時の読者の反応を意識しながら創作したと推定しておきたい。

以上の推論を踏まえつつ、当時の社会的事象との関連に着目し、「桃太郎」における歴史的事象がどのように表象されているかを考察してみたい。また、その追究の結果をもつて、この推論を裏付けたいと思う。

並行するいくつかのキーワード

芥川版「桃太郎」には、従来の桃太郎言説から逸脱する箇所がある。中でもつとも注目されるところは、鬼による騷擾もなく征伐に旅に立ったことの唐突さ、三家来が喧嘩するその様子、そして、鬼が島から凱旋した後日談の意外さである。

これら従来の噺と異なる描写には、まさに作者の言いたいことが見られると考えられる。そのために、土屋論で示唆されているように、まず、鬼が島での支配形態について詳しくみていく必要がある。さらに、繰り返し言えば、鬼征伐を終わった桃太郎の後日談については、前にも触れたように、「連れ帰った鬼の子が一人前になると、番人の雉を噛み殺して逐電し、鬼が島の鬼は桃太郎に反抗し、独立運動を起すことになっている」完成稿に対し、草稿は「知事になった犬の弾圧ぶりを描いている」という違いが認められる。その差異の原因をあきらかにするにあたって、草稿から、日本の植民地政策を思わせる箇所を引いてみる。

桃太郎の本国へ帰った後、鬼が島の知事になったのは武断主義の犬である。犬は就任すると同時に、今後角を生やしてゐる鬼は死刑に処すと云ふ布告を出した。

鬼の角を奪はうと云ふのは方寸に出たことではない。桃太郎自身の考えたことである。桃太郎の考へに従へば、桃太郎は勿論大猿雉はいづれも角を生やしてゐない。然るに鬼は子鬼から年とつた鬼に至る迄、悉角をはやしてゐる。すると鬼の鬼たる所以は角にあると云つても好い。既に角にあるとすれば、完全に角を取り除かない限り、鬼を治すことはできぬ筈である。

犬は布告を出した後嚴重に取締りを実行した。或時などは角のある鬼を一時に五百匹首を斬つたこともある。¹¹⁾

第一に注目すべきなのは、「武断主義」という表現で、これは武断政治、つまり、武力による専制的な政治統制のことである。しかし、植民地政策の投影だとする先行論を参考とし、近代日本の対外進出史を考えれば、「武断主義」とは、あの初代朝鮮総督寺内正毅によって確立され、容赦なく実行された、朝鮮に対する統治政策に近似している。それは、作品が発表された十三年前の事柄ではあるものの、草稿が描く鬼が島の場面では、犬がいかに暴力的に振舞うかについて繰り返され、その表現は、植民を前提とする日韓併合前後の情勢を想起させる。寺内の後任として長谷川好道が就任してまもなく、朝鮮「三・一独立運動」が起り、それに対し軍を動員し鎮圧したことなどで、武断政治として頗る批判を浴びたという。

二点目として興味深いことは、テキスト全体で鬼が島の鬼が一体何匹いるか具体的に示されていないにもかかわらず、

「五百匹」の鬼が首を切られたとはつきり述べられていることである。死んだ鬼は多いのか少ないのか、あるいは割合がどれだけであるのかという比較基準が不在であるのは、一考に値する。ここに出た数字は、作者が何かの資料によっているのか、それとも、単に個人的な好みの問題にすぎないのだろうか。「三・一独立運動」での犠牲者に関しては、朝鮮総督府の記録には、「五五三二」名が死亡したとの記載がある。芥川テクストの数字は、この数字に近い。朝鮮総督府が日本政府に送った調査表の関連データは、メディアを通して公になったと推測される。殆ど日本側のメディアによる情報しか入手できなかった当時の知識人にとって、「五五三名」の死者が出た事件は、なんといっても衝撃的なものであったことだろう。その情報を芥川は利用し、「五百」という概数を書き入れた可能性がないわけではない。それは、読者という存在を意識しながら、真偽とは関係なく、何かの表象として利用できる道具としてこの数字を書き込んだとも考えられる。

また、後日談に關していえば、語り手の眼差しは、草稿における「鬼が島」から、完成稿での桃太郎の故郷「日本」へと移っていることが注目される。つまり、歴史と対応させていえば、十数年前のすでに歴史になった言説から、執筆直前の数年間起こったことへの視点の移動があるということである。「番人の雉」が「噛み殺」されたとか、「桃太郎の屋形に火をつけ」たとか、「桃太郎の寝首を」かこうとして「人違い」で「猿」が「殺されたうわさ」とか、さらに鬼たちが「爆弾」の工夫をしたとか、これら一連の描写は、テロ事件以外何ものでもない。テクストの中で、唯一主体性が付与されている桃太郎に対し、鬼たちは「日本」以外の土地に住む周縁的存在となる。再び歴史を振り返れば、一九二〇年代初頭に、日本国内及び日本の植民地と称される地域では、いろいろと外国人と関わりのあるテロ事件が起こった。当時社会を騒がせた「不逞鮮人」や、アナキストなどによって起った爆弾投下、放火、暗殺事件についての報道が数多くあった。とりわけ特筆に値するのは、一九二三年の関東大震災直後、在日「不逞鮮人」が暴動を起すというデマが飛ばされたことをきっかけに、その一年間で朝鮮人に対して陰惨な虐殺や鎮圧活動があったということである。

後日談に出ているわけではないが、第二章で雉が「地震字」に通じているとされていることも注目されよう。雉に地震を予知する能力のあることは民間でよく知られたことであり、猿の馬鹿さ加減と対照的に、雉が博識だと造形するため書き込まれたともいえようが、作者の発想は、ただそれだけに止まらなかったと思える。大震災直後の日本人読者に対して、この言葉がいかにもインパクトを持っていたかは想像にたたくない。

さらに、桃太郎一行によって、「人質」として日本へ護送されていた酋長の「子鬼」のことも注目すべきであろう。は

たして、日本の歴史上にもそうした人質が存在したのだろうか。『英親王李垠伝』という本に編集責任者の岡崎清が附した「李方子さんの七宝焼」というエッセイがある。その中で、岡崎清は、「明治四十年十二月、数え年わずか十一歳の英親王は、初代韓国統監伊藤博文に抱かれて、新橋駅頭に降り立った。その写真が当時の新聞にも掲載されたそうだが、その人質の姿のあまり傷ましさに、思わず涙がこぼれたとは、私が幼年の頃、年寄りから聞いた話である」と述べている。言及された英親王とは、李朝の末代皇帝純宗李垠の弟にあたる人物の李垠のことを指している。同書によれば、彼の来日後、日韓併合条約が正式に結ばれ（一九一〇）、そのことで日本帝国の「王世子」の身になったのである。李氏王族は、皆日本王朝の爵位を授けられ、李垠の日本における身分も親王相当として待遇されたという。しかし、幼年の李垠が、「人質」としての身の上から逃れられなかったことは明らかである。

芥川「桃太郎」テクストからは、時事的な事柄がこれほど透けて見えるのに、それをただ単に偶然とみてよいものであろうか。作者が意図的にそうした可能性がある。社会的な事情をたどる前に、芥川「桃太郎」には、いくつかの伏線が敷かれることを明らかにしておきたい。

歴史が落とした影

何故、桃太郎による鬼が島征伐がなされなくてはならなかったのであろう。芥川「桃太郎」は理由らしい理由をあげていない。第二章で、征伐を「思ひ立つた訳はなぜかといふと、彼はお爺さんお婆さんのやうに、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだつたせものである」とある。また、第四章では、鬼の酋長に「鬼が島の鬼はあなた様にどういふ無礼を致したのやら、とんと合点が参りませぬ。就いてはその無礼の次第をお明かし下さるわけには参りますまいか」と聞かれたとき、「日本一の桃太郎は大猿雉の三匹の忠義者を召し抱へた故、鬼が島へ征伐に来たのだ」と桃太郎が答えている。こうした理由らしからぬ理由は、伝承の「桃太郎」のものと異なっている。伝承では、鬼があばれてこまるからとされている。したがって、芥川は、従来の征伐の正義性を無くすことによって、根本的に伝承を覆したといえるだろう。

そもそも、正当性を欠いた征伐であるのに、お爺さんお婆さんが積極的に桃太郎の「云ふなり次第に」なっているのは不思議である。老夫婦の理不尽な態度は、その「内心この腕白ものに愛想をつかしてゐた時だつたから、一刻も早く追ひ

出した」かったからである。後日談の部分と結びつけて考えれば、鬼が島から凱旋した桃太郎が、世間に知られた筋通りにお爺さんお婆さんに「親孝行」を尽くさなかつたところか、一人は桃太郎に忘れられたように一度と登場しない。考えられることは、桃太郎とお爺さんお婆さんの間に、従来の親子関係ではなく、ほかに結ばれた関係があつたかもしれないということである。

実は、テクストの冒頭部分を見て分かるように、桃太郎はその「神代」の桃の実から生まれ、特に、もともと神意を受け神武東征の案内役として記紀神話史に登場した「八咫鳥」の啄ばみを通してその神統の身分が付与され、皇族との因縁が示唆されている。他方、老夫婦は、柴刈りや着物洗いや畑の仕事など、いうまでもなく野良仕事に携わる農民である。既述したように、仕事も何もかもしやだつた桃太郎は、老夫婦とは別の世界にいると見ることが出来る。老夫婦が桃太郎に反感まで抱いたのは、労働意欲が欠如しているにもかかわらず、彼には、裕福な生活への野心があつたからだといひ。それこそが、鬼が島への征伐の背後に働きかけた真なる企てであろう。桃太郎が、勞せずして利益を得ようという考えは、典型的な寄生者のものともいえ、こうした事態は、結果として、当時、位階制の最上位を占めていた財閥や寡頭や天皇の完全なるアレゴリーとなっている。さらに、老夫婦は、桃太郎の「云ふなり」や「注文どおり」に行動するばかりで、「腕白もの」桃太郎は、まるで命令者で、お爺さんお婆さんは聽従者のように設定されている。「黍団子さへこしらへ」た前後のあたりから、貧困の中に暮らす百姓の口から食糧を搾取しようとする、桃太郎の強欲さとわがままさが仄かにうかがわれる。お爺さんお婆さんが、最低限の生活を維持するための食糧を桃太郎に分け与えてまでも、征伐の「兵糧」の黍団子を「こしらへてや」らざるを得ないというのも容認できよう。その点では、むしろ、お爺さんお婆さんは、天皇の具象といえる桃太郎像を浮き彫りにさせるための一つの装置となっている。

「黍団子」といえば、桃太郎がそれをやつて犬猿雉を家来として「召し抱へ」るのに成功したことは伝承にあるが、三者は、従来語られた通りに「仲の良い間がら」ではない。芥川「桃太郎」の第二章の文脈からは、三者が結束したのは、ただ「黍団子」の喚起力のみによるものだったことが分かる。三者は、さんざん争いあつたものの、桃太郎とも各自の打算を付き合せて、結局は、欲望を抑えて約束を結んでしまうのである。

以上から、犬猿雉の三家来が、桃太郎との交渉で駆使した掛け引き、及びその三者の相互間の嘲罵などは、戦争が起される前の天皇をリーダーとする内閣や軍隊間の、予算・権益の分配問題を容易に想起させる。桃太郎を主とし犬猿雉を

従とする鬼が島征伐の実質は、日本帝国主義による対外侵略戦争であるという先行論を踏まえれば、三者に時代の投影が読みとれよう。旧天皇制の機構上の特質が、天皇の権限の強大さと、天皇に直属する諸機関の分立性にあったことはいうまでもなからう。そのような構造には、必ず巨大な矛盾対立が潜在している。指導者・桃太郎と従者・犬猿雄という構図には、絶対的な統帥・天皇の下に位置する内閣と、陸軍と海軍の絡み合った事情が仄めかされるだろう。それに、この関係こそが、先述のように、酋長の質問に対する桃太郎の答えに隠された、征伐の真なる理由により近いと思える。しかし「打ち出の小槌」を得るために、犬猿雄三者が喧嘩や争いを経た後、矛盾を抱えたままにもかかわらず、矛先を一致して征伐の道へと向けるようになった。それは、時の陸海軍と内閣三者の妥協を通し、対外侵略を遂行しようとする日本の状況に似通っている。

以上のように、テクストに出ている百姓の食料なり、軍隊の「兵糧」の黍団子なり、三家来の分配不均衡による「不服」なりは、いずれも大正以降の日本が、内なる矛盾を外部へと転換させるために、帝国が植民地争奪戦に踏み出さざるをえない歴史のプロセスの表象といえよう。その過程に典型として挙げられるのは、不作が主な原因であった従来のみ騒動とは異なる大正の「米騒動」であり、対外戦争を中心にした「軍拡」と「軍縮」の繰り返しであり、植民地政策の推進と植民地の拡大化などである。

このように考えると、訳もなく「忽ち唱え出し」た猿の「不服」を、桃太郎が「手腕」を振るって得意な弁舌によって、懐柔するのは、老練な政治家の風刺となっている。特に、伝承の昔話の宝物をすべて持ち出すのではなく、打てば何でも得られる霊力を持つ「打ち出の小槌」だけを説得の条件としてつけているのは、意味深いことであろう。そこに、利害関係をしりぬいた桃太郎に賦与された「単純」ではない側面もうかがえる。それで、犬猿雄の仁智勇の従来イメージ像が崩壊していくにつれて、桃太郎にあるはずだった悪悪の英雄像も消去していくことだろう。

再び草稿に戻り、鬼のことを考えてみよう。従来からすると、桃太郎一行の征伐が、いよいよ終わりに近づくかのように見えるところで、鬼が島での支配ぶりの真実を探究されている。草稿で、犬による鬼が島の統治ぶりが重視されているのは、一目瞭然である。無論、「知事」になった犬は、桃太郎に忠誠を尽くし、お上の代わりに、「鬼が島」において地方支配権を行使する役割を果たしている。桃太郎の意図を汲み、犬が鬼たちの「角を取り除く」ことがクローズアップされているが、その意図は一体何であったのだろうか。

その疑問に対し、まず「角を取り除く」の言語上の意味から解釈したい。「角を取り除く」という文句から「角を折る」といった慣用句が連想される。辞書によれば、「角を折る」は「我慢の角を折る」意で、「我を折る」に同じという。この「我」には、「思う所に凝り固まって、人の言に従わないこと」との意味がある。その説明から、ここで「角」は「自我」の象徴と読める。また、「種族」や民族の観点からすれば、それは、ある「民族」のアイデンティティーといえよう。種族として「鬼」たちが、それなりの伝統や文化を備えていることも、テキストに明示されている。実は、芸術、歴史、文学、生活習慣すべて面からしても「鬼」族が「日本」にも劣らぬ文明、つまり文化的な「自我」のある基盤といえるものを持つ存在として肯定的に描かれている。見た目では「我々人間の妻や娘と少しも変らずに暮らしてゐる」にもかかわらず、「鬼が島」といった基盤内容を考えれば、実に鬼らしく独特で、「日本」とは根本的に違っている。ひるがえっていえば、その基本的な差異によって、「我々人間」世界と対等的な取り扱いが桃太郎たちに要求されるわけであろう。そこに潜んでいる鬼たちの平等意識こそが、犬に取り除いてほしいという桃太郎の真意があると考えられる。日韓併合以来の日本になぞらえられた桃太郎の行動には、鬼が島を征伐しにきたからには、「平等」などないという立場が読み取れる。

前述したように、当時日本の植民地政策で、「武断政治」として有名なのは、朝鮮に対する支配が挙げられる。主なものは、当時施行された「同化政策」と「朝鮮教育令」で、それによって朝鮮族の基盤を根本的に瓦解させ、韓国人の間には絆として共有できる歴史的な継承を絶たんとし、それによって親日の勢力を養成しようとした。日本の地方とされた韓国との間に、同一性が欠如しているのは、実は「桃太郎」における桃太郎たちが、鬼が島のような角を持っていないことと同質と考えられる。

また、テキストの最後には、鬼の「角を取り除く」という命令に対して、犬が「一時に角のある鬼を五百匹首を切」ったと書いてあるだけで、その理由はまったく触れられていない。それは、鬼の「角」が、簡単に取れないからだとも考えられる。表現上では、「反抗」という文字が目に入らないが、この虐殺の誘因として、鬼が屈服せずに反抗し、犬が我慢の限界を超えたとも捉えられよう。すでにテキストの結尾に至りながら、このように特筆している理由は、朝鮮の「三・一運動」と関連している可能性もある。

先述したように、完成稿と草稿との間の時間の推移を見逃してはならない。その間にいかなる歴史的事件があったかを見てみよう。海老井も言っているように、作者は、鬼の反抗を強調するために、完成稿では、単なる鬼が島での支配ぶり

を描くことから脱し、鬼の抗争ぶりまで立体的に描出している。無論、植民地をめぐる歴史展開は、相互的で連動的に影響し合っているため、すでに述べたように、植民地側における政策の変更は、必ず被植民側における反探（平等への要求）として現われるわけである。一九二〇年前後、完成稿の後日談に出ている鬼による行為は、朝鮮人によって行われたテロ事件との関係があるように思える。テキストでは「雉を嘯み殺」し、「桃太郎の屋形へ火」をつけ、「桃太郎の寝首」をかくしたが、人違いで猿を殺すことなどに擬され、桃太郎の「必ずしも幸福に送った訳ではない」一生であったとする設定は、当時の一連の事件と緊密にかかわっている。「執念深い」鬼の行為に困った桃太郎の身に、朝鮮人の「執拗」な抗争に手の打ちようのない天皇とその側近の姿がうかがえるのである。

関東大震災直後、朝鮮人と関係のあった社会主義者やアナーキストが関与した事件があった。「亀戸事件」「甘粕事件」「虎ノ門大逆事件」、及び一九二四年の爆発物取締罰則違反で検挙された「朴烈事件」などが連発し、テロ事件が頂点に達した。これが、鬼による騷擾の真相を究明する手がかりでもある。こうした歴史事件を示唆するためには、桃太郎に対する暗殺未遂（人違いで猿が殺されてしまった）や、犬と桃太郎の会話の遣り取りや、鬼が島での爆弾への工夫などは、もっとも適切な手段となっているだろう。新聞メディアに関係していた知識人であった芥川は、それら暗躍した連携を知らないはずがない。特に、松本清張は、『昭和史発掘』の「朴烈大逆事件」の章で、芥川自身、同情者として朴烈らの活動に金を出したことがあるという説を記している。松本の根拠がどこにあるかは不明であるが、杜撰ではないと認識できる。さらには、上述した草稿に出ている、鬼が島の死者の「五百匹」の数も、何らかのルートを経由して入手したものかもしれない。

創作の技法と戦略

以上は、芥川「桃太郎」の登場人物との相互関係の観点から、創作期の発想が、いかに時代コンテキストと関係しているかを追究してきたが、つぎには創作の手法とその目論みについて考えてみよう。

前節で論じたように、「地震字」が「鬼が島征伐」の時間的な暗示であるに對し、草稿の後日談においては、「武断主義」が行われた「鬼が島」の空間的な意味がそこに込められている。そうすると、同じ言説に大正前後時代をまたがる時間的

なズレがあることが感じられてしまう。そのズレに関して、完成稿の中ではどのような方法で解決したのかを見てみよう。実は、書き直された部分は、「朝鮮」という舞台における「武断政治」期からの延長にすぎないと推察できよう。つまるところ、関東大震災前後から「桃太郎」の掲載時まで、すなわち一九二〇年代初頭に、朝鮮植民地に関した出来事を何らかの形で暴こうとする意図が作者にあったと仮定できる。

芥川「桃太郎」の第三章で、鬼が島の鬼を紹介するついででもあるかのように、鬼に対する日本の姿勢について述べられている。そこでは、「女人自身のいふ所を悉く真実と認める」のは、頼光らが「女性崇拜家」であるからだと評されている。この場面が、桃太郎の征伐のコンテキストとどのように接合しているかを追究したい。

前述の清張の「朴烈大逆事件」によれば、朴烈たちが大逆罪として処刑されたのは、当時の責任予審判事が、「新山初代」という女性の証言をもとにでっちあげたのだとしている。つまり、新山の話を悉く疑わずに信じて朴烈たちを告訴した責任判事のこと、テキストで、あの「女人自身のいふ所を悉く真実と認める」のは頼光らが「女性崇拜家」であるからだ、というところと一致している。新山という人物について、清張は、何回も「口が軽い」とか「官憲にべらべらとしゃべった」と書いている。そうだと分かるのは、当時、事件についての裁判記録に残った朴烈と金子文子の話によったからだとい、それは当時の新聞記事にも載ったとい。朴烈たちの活動に関心を持つ芥川が、報道以上の真実を知っていたことが推測できる。

民俗学では、鬼が古来、「疎外」されたものとして「政治の中の反主流者」ともイメージされているという。実のところ、朴烈事件のように、日本国内の社会主義者や無政府主義者と深い関係を持つ「鬼」による騷擾は、すくなくなかった。そのいずれも、彼らが政府側に「悪」の源と見られ、度々制限し抑圧されてしまった結果といえる。当時の日本の民衆構成（植民地からの移民が多い）と結び付けて考えれば、それは日本国内部にしかなかった現象であろう。つまり、外地からの移民であれ、内地の「社会改革」を目指した人たちであれ、生存には最低限の人権を獲得するために、「日本」という土地でそれぞれの形で結合するようになった。そこで、権力を握る側に恨まれ、「異端」としてしか認められなかった。他者化されることは、まさに人間から疎まれ、虐げられ、代価を惜しまず除こうとされた鬼の立場そのものである。したがって、先述したとおり、芥川「桃太郎」の第五章に登場している鬼が島の鬼が、朝鮮人の寓意だとすると、第三章で挙げられた日本の鬼は、実は、日本人社会主義者とアナキストの具現化したものといえよう。「日本の鬼」と「鬼が島の

鬼」が、同じ節で扱われたのは、社会的な暗喩に他ならない。

日本本土の鬼は、桃太郎が征伐しようとする鬼が島の鬼と同じ立場に置かれている。つまり、鬼が島の鬼は、桃太郎一行と対立するようにされているのである。ただし、鬼が島の鬼の場合、それが顕在的であるに對して、日本本土の鬼の場合は、潜在的である。しかし、「鬼」が示唆する対象は、語りの途中で、読み手の気づかないうちに変えられてしまっている。簡単に言えば、「鬼」というイメージには、被植民側のみならず、日本側の社会運動者も包含されている。このように、テクストの「鬼」には両義性が備わっている。

以上の論理は、先行論にある、鬼が島がなぜ南洋にあるのかという空間的問題にも関係している。一九二〇年に行われた国勢調査²⁵によると、調査の区域、対象、植民地の三項に、朝鮮と台湾及び樺太も「日本帝国の版図全部」に帰し執行するように示されている。南洋群島は、第一次世界大戦後の一九二二年にドイツから委任統治という形で正式に日本の版図に入った。桃太郎の征伐を最初から最後まで総合的にみると、南洋を連想させるのは、鬼が島の風景描写によっていることが多い。だが、鬼の指示対象が両義的であることに対応させてみれば、鬼がいる空間の指示が曖昧になってしまう。

さらに、空間の指示対象を明らかにするため、特筆すべきことがある。以上のように論じてきたテクストの特徴といえる場面描写からみると、南洋群島を植民地にする手段と措置は、桃太郎の征伐とは異なっており、また、歴史上始終隷属地位にあつて帰属権が不定の台湾と樺太は、「建国以来」という言葉には合わない。それは、すでに提示した「人質」の存在のことである。国勢調査に出た日本本土以外の区域では、韓国以外では、「日本王世子」といった人物が存在しなかったことがある。既述した『英親王李垠伝』から引用した話は、編者によれば、年寄りから聞いたというから、李垠は、当時、一定の層の日本人の間では「人質」だとの共通認識があつたことが見て取れる。年代からしても知識水準からしても、芥川は、この層の日本人に属すると考えられる。当時の新聞から、韓国の英親王李垠の来日については、「人質説」があつたことが分かる（注十五を参照）。さらに言えば、この李垠は、日本の陸軍軍人となり、一九二〇年に梨本宮方子女王と結婚し、死の直前になってやっと帰韓できるようになったが、日本で一生を終えたに等しい。世子とその結婚にに関する記事は、時のメディアに頻出していたのである。「政略結婚」に操られたといわれていた。新聞によれば、婚礼日に、この政略結婚に憤慨した朝鮮人の徐相漢が、日本人の世子妃の馬車に爆弾を投げようと計画したが、密告されて逮捕されたという。これも、「鬼が島の鬼」に起された騒擾のひとつといえる。勿論、芥川には、李垠の後の運命がわかるはずがな

かった。が、「桃太郎」の中で、「子鬼」は、大人になった後、屈服せずに「鬼が島に逐電した」と予言的設定がなされている。この筋書きは、植民地に対する一般的な認識によって作られたものであるのか、それとも「人質」、の李朝世子のスタンスに立ち、彼の本心を想定した上に書かれたのか、それは不明のことである。ただ稿者は、後者ではないかと思う。まとめていえば、「南洋」言説は、確かに植民地の枠をもっているものの、前に論じたとおり、植民地へのプロローグ的な役割を果たしているだけである。すなわち、「鬼が島」描写の字面に潜んだ影は、実際、南洋的な風景を経由して朝鮮へと指向しているのである。この「南洋」風景は、前の「八咫鳥」と同様に、ある「道」へと導く案内役として造形されているのだ。鬼が島の空間性においては、南洋はただの見せ掛けであり、その内実は朝鮮といえる。それは、「南洋」言説に仕掛けられた罠であり、換言すれば、いわゆる目を晦ます目論見を応用させた結果にほかならない。

執筆動機との関連

もし、このとおりであるならば、作者がその複雑な創作方法を採用したことには、なにか特別な理由が隠されているのだろうか。それは、草稿から完成稿へ至る過程を分析してみればよからう。両者には、ほんのわずかの差しかないとしても、時代におかれた作者の心情を読み解くためには、肝心なこととなる。すでに述べたように、鬼たちによる騷擾が描かれる後日談には、東京大震災の朝鮮人虐殺が投影されている。では、地震及びそれによる後続の事件は、地震を自ら経験した芥川にいかに関与を及ぼしたのだろうか。芥川自身も言及しているが、彼は当時の自警団の団員であった。それは見逃してはならないことだろう。琴秉洞が編著した『朝鮮人虐殺に関する知識人の反応』によれば、自警団に参加した社会主義者もいたという。琴は、大杉栄（甘粕事件の主役）や河合義虎（亀戸事件の主役）のような、自分自身も警察に狙われた社会主義者が自警団に参加したのは、朝鮮人を殺すためではなく、ある意味で自己本能が働いたためだと主張している。同時に、芥川の震災に対する文も四編収録され、その文については、ただ「大震に關しては、幾つかのエッセーがある。その中で流言や朝鮮人問題にも触れたものを抜いたのだが、彼はいささか韜晦めいた独特な文体に潜ませているが、彼の人間の本质といったようなものが、ゆくりなくもほの見えるようである」との解説がある。が、芥川の自警団に参加した自らの理由は触られていない。考えるに、彼自身が同じように持つ人間性と自発的な自衛本能が要因のひとつとなり、

やむをえなかったではないか。芥川の手によって負傷か死に至った朝鮮人がいたかどうかは確認できないが、朝鮮人が虐殺された場面に出くわしたのは少なくともなかったろう。

また、琴の資料によると、震災についての特集号が雑誌などにあったにもかかわらず、朝鮮人虐殺や流言の真相に関するものや、その「忌諱」に触れたものなどは、発売禁止の厄に遭った史実も示されている。しかしながら、震災後当時の多くの雑誌は「震災特集号」を出しているが、その中の文章を見ても、その厳しい時代を生きていた作家たちが、「この三種の虐殺事件の不当性に対して、まともな講義や批判を行なったものはほとんどいない」と三好行雄は時の文人を咎めている。勿論、その旨めには、社会正義を守護する文人としての義務感の喪失に対する遺憾が込められていたが、実際は、そうとも限らない。芥川の文に限っていえば、確かに韜晦であり、明白な表現を避けるようにするのはその独特な文章を作りたい思慮もあったにせよ、所によつては、いわゆる言論自由の問題にも関わっているのではないかと思われる。当時の言論弾圧そのものに対する顧慮は、以上紹介した芥川地震感想文に、伏字が何箇所も使われていることから証明できる。「桃太郎」に伏字はないのだが、その婉曲的な表現技法にも、それら伏字の場合に類似した苛酷な検閲の時代背景が反映していることを看過すべきではない。以上の分析から、それほど遠まわしに書かれているにもかかわらず、草稿文と比べてみると、完成稿の方は、より具体的な情報をより多く提供していることが分かる。完成稿へと改稿する過程で、政府の対鮮問題の実質とその植民地政策への風刺がなされたと考えられる。

実は、芥川は「侏儒の言葉——ある自警団員の言葉」にこう書いている。

(…) 我我人間は過去や未来にも生きなければならぬ。と云う意味は悔恨や憂慮の苦痛を嘗めなければならぬ。(中略) 自然はただ冷然と我我の苦痛を眺めてゐる。我我は互に憐れまなければならぬ。況や殺戮を喜ぶなどは、——尤も相手を絞め殺すことは議論に勝つより手軽である。

ここで、芥川は、二ヶ月前の自警団員の経験をもつて、一種の懺悔か反省をしているとも理解できよう。「侏儒の言葉」の中で、その後につづく「暴力」「政治的天才」の両篇も、揶揄するような口調で書かれているのは、この反省の延長線上にあるからこそだと思える。

そういえば、「桃太郎」の末尾にある「天才」についての予言は、「政治的天才」の前奏であり、その婉曲的表現とも捉えられる。それらに見られる感情の蓄積は、大正十三年（すなわち中国旅行から三年後）になって成熟し頂点に達したため、結果としてストーリー性（フィクション）に富む小説となったが、完成稿は、政府の残虐に対し無声の告発と批判を行ったものになっているのだろうか。勿論、芥川ならではの皮肉は、完成度の高いものとなっている。この点において、草稿では、それほどの完成性が期待できないものであったろうことは、いわずと知れたことである。完成稿に点在している、深く豊かな情報から、当時の読者がこの隠されたもう一つのストーリーを読み解いてくれるのだろうかという期待が、芥川にあったのかもしれない。

終わりに

以上の論述から、芥川の「桃太郎」は、作者が社会に関心を充分持っていたことを示したものになっている。それは、社会派作家芥川の文学の姿でもあろう。この論がもたらす今後の研究課題としては37、翌年、芥川は、岸田国士慰問集のために、この作品を提供したが、それは、作者のいかなる思惑にも基づくものであったか、及びその『白葡萄』という合著集のほかの作品といかなる関係を有していたかという問題が残されている。それは、芥川の提唱した「筋のない小説」という文学理念と関わっているかもしれない。

注

- (1) 滑川道夫「桃太郎像の変容」（東京書籍、一九八二）を参照のこと。
- (2) 『芥川龍之介の桃太郎論』『民主文学』一九八二・一。
- (3) 『社会文学』通巻十九卷（二〇〇二・九・十二）
- (4) 『芥川龍之介資料集・解説』（山梨県立文学館、一九九三年）二六頁
- (5) 滑川道夫前掲書・一二二頁
- (6) 『日本昔話』全二十四冊（二八九四—一九六）
- (7) 『桃太郎主義の教育』（縮刷名著叢書）九（一九一五・二）

- (8) 『毎日新聞七十年』を参照のこと。(毎日新聞社、一九五二・二)「新聞社発行の雑誌としては朝日新聞の『週刊朝日』とともに最も古い歴史を持ち、時事的な大衆雑誌として出版界のベストセラーである。(略)当時の出版界にあつては、雑誌でもない、新聞でもない、特殊出版物として値段のやすいこと(十銭)とともに大衆に親しまれた。」と述べている。
- (9) 滑川道夫・前掲書九章の「京の薬兵衛の戯作的作品」と『桃太郎統話』を参照のこと。
- (10) 原文引用は凡て一九九六年に岩波書店から出版された『芥川龍之介全集』による。
- (11) 同全集第二十一巻四〇六頁
- (12) 『朝鮮三・一独立騒擾事件―概況・思想及運動―』(朝鮮憲兵隊司令部編、巖南堂書店、一九六九・三)五頁に「三・一事件騒擾調査表」がその数字で記録されている。その調査表について「この三・一運動に参加した人の数、運動の起こった場所、運動の回数、参加した人のうち検挙された人の数・全上殺された人の数等に関する数は、資料によつていろいろ違いがある。これらの数字で一番大きいのが、朴殷植の『韓国独立運動之血史』で、その次が朝鮮駐劄憲兵隊司令部の調査による「三・一事件騒擾調査表」である。本書には朝鮮總督府の資料であるが、当時はいうまでもなく憲兵政治の時代であるから、この總督府発表の数字も憲兵隊司令部から出たものであることは間違いない(中略)その「諸表」というのは、朝鮮憲兵隊司令部と朝鮮總督府総監部から日本政府諸機関に送った「朝鮮騒擾事件経過概覽表」である事は間違いないまい。」との説明が付く。
- (13) 岡崎清『英親王李垠伝・李王朝最後の皇太子』(共栄書房、一九七八・八)
- (14) 『文芸春秋』一九七六二月号所載
- (15) この人物については、時のメディアによく報道される。一九〇七・十二・十五の『都新聞』に「日本入京の韓國皇儲」を標題とする写真付きの記事がある。中に「本日午後二時四十分新橋御着の御予定なる韓國皇儲英親王殿下が最初日本御渡航及び御留学の事が決定するまで伊藤統監と韓國閣臣の苦衷は非常のものにて例の煩瑣暗愚な雜輩等を始めとし狐疑心深き彼の國人等恰も英親王を戦国時代の人質に取らるゝもの、如く考へ縦令生命には別條なきも日本渡航後は定めて幼君を見る影もなく虐待すべしとて只管妨害運動を試み流言蜚語至らぬ限もなく大騒動の起らせんとせる形勢なりしが(後略)」記している。
- (16) 滑川道夫・前掲書を参照のこと。「小波桃太郎の変遷」の項では、「日本昔噺」に出る宝物については、「まづ隠蓑隠笠を初めとし、打出小槌、如意宝珠珊瑚瑠璃真珠」と述べられている。その上、伝承には、打ち出の小槌が宝物として登場しないものも、沢山ある。
- (17) 『朝鮮教育令』については、一九一一年に第一次、一九二三年に第二次、一九三八年に第三次で勅令で公布されていた。(『議院新聞』CD-ROM 二・469)
- (18) 高嶺宗『韓国史入門』(国書刊行会、一九八一・十)五二一頁を参照のこと。
- (19) 梶村秀樹『梶村秀樹著作集第4巻・朝鮮近代民衆運動』(明石書店、一九九三・十)によると、その一連の事件の中で名を挙げられているのは、以下のとおりである。(1) 一九一九年九月、齋藤実新総督がソウル着任する時、爆弾を投げられた。(2) 一九一九年九月の釜山

- 警察署爆破事件。(3) 一九二〇年十二月密陽警察署爆破事件。(4) 一九二二年九月朝鮮總督府爆破事件。(5) 一九二三年二月上海での陸軍大將田中義一狙撃事件。(6) 一九二三年一月の鐘路警察署爆破事件。(7) 一九二四年一月東京二重橋爆破事件。
- (20) 加藤文三「日本近現代史の発展・上」(新日本出版社、一九九四年)で、三事件それぞれは一九二三・九・四に、九・七に、十二・二七に起きたという。(二二〇・二二二頁)
- (21) 松本清張「松本清張全集三十二・昭和史発掘」(株式会社文芸春秋、一九七三・十二・六十・七十六頁に、「さらに、その供述が過剰になったのは、自分たち以外の者に、迷惑をかけたくないという気持ちが強かったのである。彼は同志以外にも、有島武郎から雑誌『太い鮮人』の広告料名義で援助を受けており、芥川龍之介からお金をもらったことがあるといわれている」とある。
- (22) 『続・現代史資料二・アナキズム』(小松隆二解説、みすず書房、一九八八・七)の「朴烈・文子事件主要調書」を参照のこと。
- (23) 森長英三郎『新編史談裁判・二巻』(日本評論社、一九八六・六)によると、裁判の日の法廷の様子を当時『法律新聞』(二五一六号)で伝えられた。また、一九二五年十一月二十五日の『読売新聞』朝刊三面の記事によると、朴烈事件が発覚された以来約二年間「新聞記事掲載を差止め」されて、当日に至って「一部解除」され報道された。それに、事件の関係者同士では「恋の三ツ巴」という太字で人目を引いた。特に、新山初代については、「初代は朴烈を独占しやうと文子を恨み恋の同士打ちから遂に金(重漢、初代の情夫：筆者注)は短刀で朴を脅かしたことすらあったので発覚するに至ったのである」との記述がある。それは注(22)の本に載せられた「朴烈・文子事件主要調書」とは多少異なっている。
- (24) 芦田正次郎『動物信仰事典』(北辰堂、一九九・四)には、「鬼という表現には、疎外されるものの悲哀も感じられている。日本の鬼が巨大な力で悪者と同じ姿で人を守るという事から、鬼とは『まつられぬもの』(政治の中の反主流者)の総称とも考えられる」とある。
- (25) 一九一八年・三・二十七『読売新聞』朝刊に面に「国勢調査施行令公布」に関する記事がある。
- (26) 岡崎清・「李方子さんの七宝焼」という文を参照のこと。
- (27) 一九二〇・六・九『読売新聞』朝刊五面に載せた「王世子と方子而殿下華燭の御盛筵に爆弾投擲の陰謀 更に齋藤総督を襲ひ各官廳を爆破し排日の反感を煽らんとして中途に発覚 不逞鮮人」とに少年」という見出しの記事を参照のこと。
- (28) 「大震維記」は一九三三年十月『中央公論』第三十八年十一号に掲載、「大震日録」は『女性』一九三三年十月号に掲載、「大震に際せる感想」は『改造』一九三三年十月号に掲載。
- (29) 加藤文三・前掲書・一二〇頁に「政府が意識的につくりだした混乱のなかで、六千人を超える朝鮮人が、軍隊・警察・在郷軍人会・右翼及びデマにおびえ自警団を組織した一部の市民の手により、機関銃・銃剣・日本刀・竹槍などで虐殺された」と述べている。この「意識的につくった混乱」とは注(30)の史料では、「大震時、朝鮮人が暴動を起した、放火している、井戸に毒を投げ入れた、強盗・強姦を行」う流言のことだと解説している。
- (30) 琴兼洞『関東大震災朝鮮人虐殺問題関係資料Ⅲ』(緑蔭書房、一九九六・四)

- (31) 一九三三・十『中央公論』第三十八年十一号に掲載された「大震雜記」、『女性』一九三三年十号に掲載された「大震日録」、『改造』一九三三年十月号に掲載「大震に際せる感想」、『文芸春秋』一九三三年十一月特輯号に掲載された「保儒の言葉」。
- (32) 関口安義（ほか）編『芥川龍之介新辞典』（翰林書房、二〇〇三・十一）には、「関東大震災」という項がある。中に「自警団批判」という見出しで「警視庁警保局の指令を受け、自衛手段として半ば公的に結成され、一家の主かその代理人などが出て、町の要所を固めることになる（中略）『ある自警団員の言葉』は、その折の体験に基づいたものである。（中略）ここに芥川の自警団への痛烈な批判があるのを読まなければならぬ。」と述べている。
- (33) 琴乗洞前掲書に、史料45、46については、『文章俱樂部』（新潮社）11月号の編集の後記、「記者より」には、「前号『凶災の印象と東京の回想』号は、不幸にして、その筋の忌諱に触れ、発売禁止の厄に遭しました。が、直ちに改訂版を作って発売しました」とある。忌諱に触れたのは何の問題だったか、云うまでもあるまい。」と解説している。
- (34) 同文に三宅雪嶺の説によると「大杉栄事件、平沢計七事件（前文の甘粕事件と亀戸事件の別名―筆者注、「朝鮮人大量虐殺事件」をまとめた言い方である。
- (35) 『東京大学公開講座・地震』（東京大学出版会、一九七六・十一）にある「地震と文学の」による。
- (36) 『文芸春秋』一九三三年十一月特輯号に掲載され、後『関東大震災朝鮮人虐殺問題関係資料Ⅲ』にも収録されている。